

平岩弓枝

風よ ヴェトナム



平岩弓枝

風よ
ヴェトナム



新潮社

風^{かぜ}よ ヴェトナム

一九九八年 二月二〇日発行

著者 平岩^{ひらいわ}弓枝^{ゆみえ}

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一八七一

電話 編集部(03)三三六六五四一一

読者係(03)三三六六五一一一

振替 〇〇一四〇五八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社



© Yumie Hiraiwa 1998,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-327910-9 C0093

価格はカバーに表示してあります。

風よ

ヴェ
ト
ナム

目
次

ミス・サイゴン	7
マジエスティックホテル	28
八月革命通り	48
ハノイにて	67
阮紅玉の孫娘	86
事故	111
ボートピープル	133

梅本雄太郎の手帳

153

船の旅

172

南シナ海

191

海賊

210

ホイアンへ

230

祖国

249

装画 蓬田やすひろ
装幀 新潮社装幀室

風よ

ヴェトナム

ミス・サイゴン

一

シチリヤの強烈な太陽の中を抜け出して来たせい、初夏のロンドンの日ざしはほのぼのと優しい感じがした。

当人は意識していないが、どこへ行ってもまず光とか明るさに神経が働くのは、彼が舞台照明という仕事をしているのと無関係ではなさそうである。

中型のツーリストバッグを無雑作に提げて、大友健はヒースロー空港の地下鉄駅へ歩き出した。ロンドンとは東京と同じく、どこへ行くにも地下鉄が便利だが、殊に空港からいきなり地下鉄で市内へ入れるというのは旅行者にとって、すこぶる親切だと、健は来る度に思う。

実際、座席に腰を下してなにを考へるでもなく、すぐ近くで濃厚なキスシーンを飽きもせず繰り返している若い男女を見るような見ないような素振で時が過ぎて行くと、忽ちプラットホームの駅名にナイツブリッジとかピカデリーサーカスなどという馴染のある文字が読めて来る。

コヴェント・ガーデンで健は下りた。

この駅の周辺は劇場が多く、健にしても過去に何度となく歩き廻った町だけに、足は自然に目的地へ向いている。

オペラハウスの脇を抜け、通りを二つほどまがってホテルの前へ出た。

フロントで訊いてみると、すでに義兄の名で予約が入っていた。まだ正午前なので、どうかなのと思っていたのに、掃除のすんでいる部屋へ案内される。

このホテルの建物はかなり古いが、内装は最近、手を加えたらしく、ダブルベッドの部屋はさっぱりとした感じで悪くない。

バッグを開けて、ロンドンへ着いたらクリーニングを頼もうと思っていたシャツやジーンズをひっぱり出していると、電話がかかった。

「健ちゃん、もう着いてたの」

子供の時分とあまり変わっていない姉の声が弾んでいた。

「今だよ、たった今、チェックインしたばかり……」

「部屋へ行ってもいい」

「いいさ」

電話が切れてから、部屋にドアをノックする音が聞えるまでが早かった。姉のせっかちは父親ゆずりということになっている。

「焼けたわねえ」

というのが、姉の第一声であった。

「シシリー島、何日、行ってたの」

「なんだかだで、十日かな」

「暑かった」

「連日、三十度以上」

「野外の舞台だったんでしょう」

「シラクーサのギリシャの古代劇場」

「そんな、かんかん照りの所へお客が来たの」

「上演は夜。しかし、準備は日中」

「まっくろけになる筈^{はず}だわね」

「義兄^{にい}さんは……」

「テムズ河の傍に出来た新しいビルをみに行ってる。あたしはお買い物……」

手にしていた紙袋を弟へ突き出した。

「東京へ帰る時、持って行きなさい。お父さんにはベルト、お母さんには夏物のショール、洋子には服だの、バッグだの。女の子のものって可愛いのが多いから、つい、買ってしまふ。その点、男の子はつまらないわ」

それで、健は姉夫婦がヴェトナムから夏休みを取ってロンドンへやって来た目的を思い出した。
「協^{きょう}には会ったの」

「一昨日、寄宿舎へ訪ねて行ってね。昨日は日曜だったから、むこうが出て来て、一緒に御飯食べたりしたけど、男の子って、万事さっぱりしすぎていて……。まあ、めそめそされても困るけど……」

「元氣だったんだろう」

「元氣、元氣、この上もなく元氣……」

姉夫婦の一人息子の協は、昨年の九月からイギリスへ留学していた。大手の建設会社に勤務している父親が、年中、仕事で中近東だの東南アジアへ出かけていて、それがまた、女房がいなくなにも出来ない男だから、息子は小学生の時分から祖父母にあずけられることが多かった。そのせいもあって、はやばやと親離れしているというのに、親のほうの子離れの出来ていないところがあって、イギリス留学の話が出た折には、大揉めに揉め、成り行きで健が甥の味方をしてやった。

そうした事情があるので、今回のシチリヤでの仕事が入った時、帰りにはロンドンへ廻って、協の顔をみて行くからと、ハノイの姉に連絡したところ、それなら自分達もと、早速、夏休みを取ってロンドンへやって来たものだ。

部屋の電話が鳴った。受話器を取った姉が、

「あら、お帰りなさい。健ちゃん、早くても一時頃になると思ってたら、もう着いたのよ。わかりました。相談します」

一人で喋って切った。

「お昼、なに食べたい。夜は健ちゃんも久しぶりだろうからって日本レストラン予約してあるから……」

健は苦笑した。義兄がなかなかのグルメであるのは知っている。

「チャイナタウンに旨い店がある。でなければ、インド料理……」

「中華はヴェトナム料理と大差ないから、インドのほうがいいわ」

「ピカデリーサーカスの近くだ」

「あの人、お腹すいてるんですって。朝食に大きなオムレツ食べたのに……」

姉の夫の影山章一はホテルのロビーで、エレベーターから下りて来た妻と義弟を待っていた。

結婚当初はやせっぽちののっぽだった。だが年々、貫禄がついて、この節は医者から減量を勧められているという。

「それでも、ヴェトナムへ行ってから少し痩せたんだよ」

ホテルの玄関を出ながらいったのを、姉が即座に否定した。

「一キロ痩せて、忽ち、二キロ肥ったの」

健は聞えないふりをして、義兄に訊いた。

「ヴェトナム料理というのは、中華料理みたいなものですか」

「似ているところもあるが、違うね」

生真面目で話好きだが、とりわけ仕事と食物のことになると熱心になる義兄が、嬉しそうに説明した。

「ヴェトナム料理というのは、中華よりもさっぱりした食感で、タイ料理より食材を大事にしている。まあ、南北に細長い国だから、北のハノイと南のホーチミンとは、少々、味の違いがあるけれども、大体、庶民の食うものが旨い国っていうのがいいね」

フォーと呼ぶ米の粉の麺の話をはじめた時、右手に劇場がみえた。

ロイヤル・ドルリイレーン劇場で「ミス・サイゴン」というミュージカルを上演している。

「ロンドンへ着いた日に、コンシエルジェに頼んだら、プレミアつきだったけど切符が取れてね、二人で観たの」

姉が夫の話に割り込んだ。

「健ちゃんは観てるんでしょう」

「四年ぐらいになるかなあ、なにしろ、初日が開いて、まだ半年にならない頃だったと思うよ」特徴のある、ヘリコプターを文字化したようなデザインの看板を仰ぎながら健が答え、

「この国はいいわねえ、初日が開いてから何年も何年もロングランが出来るんだから……」舞台美術家の娘でもある姉が呟いた。

「日本なんて、一カ月、せいぜいで二カ月じゃないの」

「こっちだって、一カ月足らずで閉める場合もあるよ」

「シチリヤの公演は、どうだった」

義兄が話をとばした。

「むこうのイベントに招待されての公演ですから、一回きりですよ」

「回数じゃなくて、成果だよ」

日本から参加したのは、新作の能であった。

能役者に狂言師、オペラ歌手が加わるといった混成メンバーで、健は照明を担当した。

「むこうのお客には何がなんだかわからなかったと思いますよ。ただ、舞台としては華麗でしたし、古代劇場とのバランスも面白かったと思います。一応、東洋のミステリアスみたいな感じが、観客に受けていました」

「ミス・サイゴンも受けてたわ」

劇場の角をまがりながら、姉が話をひき戻した。

「ヴェトナム版のマダム・バタフライだなんていう人もいるけど、あたし達、今、ヴェトナムにいでしよう。なんていうのか、親近感があるせいかな、身につまされて泣いたわ」

ヴェトナム戦争を背景にしたアメリカ兵士とヴェトナムの娘との恋物語であった。

ちやうど、健が文化庁の研修留学に応募し、パスして一年間、ロンドンに滞在した時に幕を開けた。

「キャメロン・マッキントッシュの製作するのは、大方、当っているんですよ。キャッツにしても、オペラ座の怪人にしても、このミス・サイゴンも……」

そういえば、と健は義兄と姉に訊いた。

「僕が観た時は、劇中で巨大なホーチミン像が舞台の奥から起き上るような恰好かっこうでせり出して来る舞台装置が圧巻でしたが、義兄さん達がごらんになった時、そのシーンはありましたか」

義兄が女房の顔を眺めた。

「そんなのが、あったかな」

「あったわよ」

「ホーチミンの像は右手をあげていた……」

「ううん、手は両方共、普通に下げていたけど……」

「やっぱりね」

一人合点にうなずいて、健は慌てて説明した。

「他から聞いた話なんです、その、僕が見たホーチミン像は、共産主義の指導者がよくやるように右手を上にあげている恰好だったんです。そうしたら、ヴェトナムのほうから抗議が来て、ホーチミンは、そういう英雄じゃない、子供達を両手に抱えて、優しいホー小父さんとしてヴェトナムの独立に命を賭けた人だ。右手を高くかかげた怖い独裁者のイメージはそぐわないということなんだそうです。で、結局、そのシーンはカットされたっていうんですよ。勿論、真偽のほどはわかりませんが……」

そういえば、と姉が即座に反応した。

「ホーチミン市にあるホーチミン像は両手に子供を抱えて、優しいおじいさんって感じのものだったわ」

義兄もいった。

「そりゃあ、健さんのいうのが本当かも知れないよ。ヴェトナムの人達のホーチミンに対する敬愛の情は、たしかに共産主義の指導者達の雰囲気とは違うようにみえるもの」

「ヴェトナムって、いい所ですか」

健が訊き、義兄がすっかり丸くなった顔のおかげで細くみえる目を更に細くして答えた。

「いい所だよ。僕は今まで行った、どこ外国よりも、ヴェトナムが好きだ」

「それじゃ、義兄さんがむこうにいる内に、一度、行きますよ」

「大歓迎だね」

トラファルガー広場を左手にみて、三人の日本人はいそいそとピカデリーサーカスのインド料理店へ急いで行った。